

第二の父、「やす」教授

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 病理学分野 講師 山田壮亮

単刀直入に申し上げますと、わたくしは「感謝」という徳は信じ得ても、「恩義」という徳は信じ得ないのでございます。ですので、わたくしの辞書の中に「恩師」という言葉は見つからないのであります。

畢竟、わたくしはこの世で非常に稀有な、そして幸運の持ち主であったということも、恥じらいなく申し上げたいのです。「医学」、その王道の一つと固く信じて止まない「病理学」を通じて、「第二の父」に巡り合えている訳ですから。。第二の父、それは越えたと思っても、やはりいつも私のその先を歩いている、不気味な強い「存在」。学問だけでなく人間にも何か鋭く通じた、いわゆる「人物」。そして、衰えを時に見せながらも、常に失おうとしない「前衛」と、その根底に漂う「反逆」精神。

わたくしは、病理学下積みの10年間というもの、とても幸せな時間を過ごして参ったと、心より「第二の父」に感謝の念を表すところであります。このたび、縁あって北陸金沢の地で第一歩を踏み出すに際しまして、襟をより一層正すとともに、「第二の父」へ送らせていただいた4年前の言葉をもう一度噛みしめたく、ここに共有させていただいたことをご容赦くださいませ。先生、ありがとうございます。山田壮亮拝

「心より贈る言葉 ～笹栗靖之教授退官に際しまして～

産業医科大学第二病理学 講師 山田壮亮

赤裸々に申し上げます。笹栗靖之教授は、私にとって第二の父親だったんです。いや、そりゃ御本人はお嫌でしょうが、此れは生姜ないんです。



PDF
Complete

*Your complimentary
use period has ended.
Thank you for using
PDF Complete.*

[Click Here to upgrade to
Unlimited Pages and Expanded Features](#)

人生の中で大きなターニングポイントは、間違いなく人との出会い。産業医科大学に入学してからの医学生時代、そして外科研修医・病理大学院生時代、ついには今現在に至るまで、私を父親のように温かく見守ってくれ、そして時に指導者としても厳しく対峙、叱咤してくださりました。頼り、時には遠くから眺めながらも、必ずいつか越えなければならない山、それが私にとっての笹栗靖之先生だったと薄々感じつつ、この 2013 年という一つの節目の年に確信されました。

恩義は最も信じない徳の一つであると、ヘルマン・ヘッセも言っております。非礼を働きつつも寛容に受け入れてくれる懐の広さ、笹栗靖之教授という人物の奥深さ・味わい深さを、肌で触れ理解している一人であると自負しております。まだまだ自他共に認める若輩者であり、相も変わらず恩師に対し噛み付くネズミとなろうことかもしれませんが、今後も間違いなく私を温かく、そして正しく導いてくれる第二の父親であり続けてくださりましょう。わたくし自身は、どのような形になるかは神のみぞ知るとうっちゃりながらも、少しでも近付き登り越えてみせなければならぬと、年の暮れに独り固く心に期するものです。山田壮亮拝」